

『アエネーイス』における「葬礼」

高橋宏幸

I 問題の所在

『アエネーイス』の結末場面でトゥルヌスは「私を、あるいは、そうしたいなら、命の光を奪い取ったあとの体だけでもよい、わが一族に返してくれ」(me, seu corpus spoliatum lumine mauis, redde meis 12.936f.) と嘆願する。この言葉について、Tarrant は最新の注釈書において、トゥルヌスの主眼が命乞いにあり、「殺したあと」というもう一つの選択肢は厚かましさを可能なかぎり避ける意味合いしかないという趣旨の注を付している^{*1}。この理解はおそらく大方の賛成を得るところと思われる。というのは、Tarrant が退ける別の理解として、ここにはトゥルヌスの死を意に介さない潔さが表現されているという見方も他方にはある^{*2} が、その見方に従えば、トゥルヌスの嘆願に続いてのアエネーアースの躊躇から止めを差すときの激しい怒りへという展開が不自然になってしまう、言い換えれば、躊躇や怒りは命乞いに対する反応として自然であると考えられるからである。少なくとも、アエネーアースがトゥルヌスの言葉を命乞いと受け取ったのは間違いない^{*3}。

しかし、その一方で、遺体を自分の一族に返してくれ、という言葉が遺体返還によって可能になる葬礼を含意すると考えられることに注意するとき、そこに実質的な意味がほとんど込められていないということには違和感を覚える。それには三つの面がある。

一つは『イーリアス』との関連である。指摘されるように、『アエネーイス』の結末場面はアキレウスがヘクトールを倒す『イーリアス』第 22 歌を踏まえる。そこでは、ヘクトールがアキレウスの槍によって喉元に致命傷を負い^{*4} ながら、喉笛を切られなかったた

^{*1} Tarrant, 332f. Cf. Serv. ad loc. “ne ex aperto rem viro forti pudendam peteret, interpositione usus est, dicens ‘seu corpus spoliatum lumine mavis’”; Donat. ad loc. “cum dicit seu, ... pudore interveniente non dixit apertius.”

^{*2} Heyne ad loc. “viro forti digna oratio; aperte mortem non deprecatur: vitae tamen usum nec renuit.” Conington ad loc. “the passage finely expresses indifference to death and thought for his parent’s grief.”

^{*3} ただ、アエネーアースのこの認識が正しいかどうかは分からない。この点にはあとに立ち戻る。

^{*4} 槍の射貫いた箇所は「どこよりも速く命を滅ぼす」(Hom. *Il.* 22.325) とされ、ヘクトールの嘆願は自身の死を前提としている。そこに『アエネーイス』の場合との大きな相違がある。ただ、『アエネーイス』でも、トゥルヌスを大地に沈めたアエネーアースの槍は「運命の槍」(fatale telum 12.919)、「忌まわしい破滅を運ぶ槍」(exitium dirum hasta ferens 924) と、致命傷を負わせる力があるかのように語られている。この点もあとに立ち戻る。

ために最後の言葉を発することができ、身代金を受け取ってトロイア人が荼毘にふせるよう遺体を返してくれ、と嘆願する (Hom. *Il.* 22.337-43)。これをアキレウスは一顧だにせず、遺体は犬や鳥に喰わせる、と告げる (Hom. *Il.* 22.335f., 345-354)。ここに示される英雄の激しい怒りが——ヘクトールの遺体をさんざんに痛めつけたのち——最後には神々の意向を受けたプリアモスの嘆願の前に区切りをつけ、作品はヘクトールの葬儀をもって結ばれるので、「遺体返還」と「葬礼」は『イーリアス』において詩全編を大団円に導くモチーフであると考えられる。そのような重要なモチーフに言及しながら、ウェルギリウスがそこに実質的含意を込めなかったというのは奇妙なことに思われるのである。加えて、『イーリアス』においてヘクトールの「葬礼」がアキレウスの怒りの終わりからトロイア陥落に帰結する戦争の終わりまで、そこに叙事詩が主題とした一つの出来事の完結を強く印象づけるのに対し、『アエネーイス』の結末がそれとは対照的であることも注意を引く。多くの人が感じる唐突さ、ないし、未完結の印象は——葬礼も含めた——トゥルヌスの死後について一切が捨象されたことと関係しているようにも想像されるのである。

いま一つの面は『アエネーイス』の中での「葬礼」のモチーフの使われ方に関わる。トゥルヌスの葬礼について語られることはないものの、すぐあとに見るように、詩編全体を通じて「葬礼」は特徴的な使われ方をしており、作品の主題である「ローマ建国」とも深く関わる要素が認められるように思われる。その中からここでは、それが象徴的に現われていると思われる例に一つだけ触れておく。作品の後半、いわゆるイーリアスの部分が始まる第7歌の冒頭にはアエネーアースの乳母であるカイエータへの葬礼が置かれている (7.1-7)。『アエネーイス』各歌のうちで登場人物への言及から始まるのは——序歌を別とすれば——、この他に第4歌 (ディードー) と第12歌 (トゥルヌス) しかない。第4歌と第12歌の場合がそれぞれの主人公を示す⁵⁵ とすれば、第7歌の場合には、とりわけ作品後半における「葬礼」の重要性を予示するものであるようにも想定される。この点で、結末でのトゥルヌスの嘆願が葬礼に関わる言及をしながら、十分な意味づけをもたないというのは首尾の不一致という点である種の齟齬を生じているように見える⁵⁶ のである。

⁵⁵ Cf. Austin, 25, Tarrant, 83.

⁵⁶ 後半の序歌は第7歌の冒頭から 37-45 行へ後置されている。このことから、一方で、この序歌を後半の始まり (Serv. 7.37 “hinc est sequentis operis initium; ante dicta enim ex superioribus pendent”) とすればカイエータの場合をディードーやトゥルヌスの場合と同列にはできないと考えられるかもしれない。しかし、他方、アエネーアースがカイエータの港に向かったことを語って第6歌が終わり、第7歌が乳母カイエータへの葬礼で始まること、つまり、歌と歌が接続し、明瞭な区切りのない始まり (Nishimura-Jensen, 176 によると、Kyriakidis が第5歌と第6歌のあいだでもバリヌールスについて同様の構成があり、第6歌がその前後いずれにも開かれていることを指摘しているというが、筆者未見) に留意すると、それが結末での未完結の印象と奇妙に符合することが気づかれる。

さらに、三つ目の面として、結末場面の中でも、アエネーアースの槍がトゥルヌスを地面に倒したときになされる

consurgunt gemitu Rutuli totusque remugit
mons circum et uocem late nemora alta remittunt. (12.928f.)

ルトゥリー人らは呻きを上げて立ち上がる。それに周囲の山全体が反響し、嘆声が森深くに広くこだまする。

という叙述には葬礼を思わせる情景を認めることができる。ルトゥリー人らは死の瞬間のトゥルヌスと同じように「呻き」(gemitu 928, 952; cf. 722)^{*7}を上げながら、トゥルヌスが「倒れ伏した」(incidit ad terram 926f., humilis 930)のと対照的に「立ち上がる」(consurgunt 928)。あたり一帯にこだまするような大きな嘆きはあたかもすでにトゥルヌスの死に哀悼を表し始めたかのようにも見える。その点で、トゥルヌスが嘆願の中でルトゥリー人をアウソニア人と言い換えながら、

uicisti et uictum tendere palmas
Ausonii uidere; tua est Lauinia coniunx, (12.936f.)

おまえの勝ちだ。敗者の掌を差し伸べる私をアウソニア人らも見届けた。ラーウィーニアはおまえの妻だ。

と述べる言葉が第 12 歌冒頭での

‘aut hac Dardanium dextra sub Tartara mittam
desertorem Asiae (sedeant spectentque Latini),
et solus ferro crimen commune refellam,
aut habeat uictos, cedat Lauinia coniunx.’ (12.14–17)

「この右手がダルダニア人をタルタラの底へ送り込んでやるか——アジアの逃亡兵の末期をラティウムの民は座って見物していればよい、私一人が剣でわれわれすべてにかかった嫌疑を晴らしてやる——、さもなくば、敗れて、ラーウィーニアをあ

という一騎打ちの宣言と対応していることも注意を引く。その言葉どおりにいまルトゥリー人らは一騎打ちの結果を見届けた。結果がトゥルヌスの討ち死にであれば、その弔い

^{*7} gemo, gemitus の作品中の用例 39 のうち、死の瞬間を表す場合が 4 例 (10.674, 11633, 11.831, 12.952)、死者への哀悼を表す場合が 11 例 (1.221; 1.485 (Hector); 4.667, 687 (Dido); 6.209 (Misenus); 9.499 (Euryalus); 10.465, 505, 843, 11.37, 95 (Pallas); cf. 2.323, 2.486) 見られる。

をするのは彼らのはずである。とすると、トゥルヌスの葬礼は描かれなくても、葬礼を施す人々の姿は結末場面に描き込まれていることになる*⁸。

そこで、以下には、『アエネーイス』に現れる「葬礼」のモチーフを検討*⁹し、これを踏まえて、あらためて結末場面での「遺体返還」と「葬礼」の問題を考える*¹⁰。

2 「葬礼」

2.1 基本的通念

まず、よく使われる「葬礼」のモチーフを確認しておく。その一つは、死者の霊は埋葬を施されないかぎり、彼岸へ渡って平安を得ることができないため、葬礼を乞い求めるというもので、『アエネーイス』でも第6歌に用いられる。冥界に降り、ステュクスを渡ろうとしたアエネーアースがパリヌールスの霊を見つけて声をかけると、パリヌールスは海に沈められた経緯を答えたうえで、

‘eripe me his, inuicte, malis: aut tu mihi terram
inice, ...

sedibus ut saltem placidis in morte quiescam.’ (6.365f., 371)

「不敗の英雄よ、この災厄から救い出してくれ。あなたの手で私を土に葬ってくれ。……せめて平穏な場所で死後の安らぎを得られようから。」

と埋葬を求める。

死者の霊が平安を得ることは、翻って、遺族への慰めとなる。パッラースを倒したトゥルヌスはアルカディア人らに向かって

‘memores mea dicta referte
Euandro: qualem meruit, Pallanta remitto.

*⁸ そう理解したかどうかは分からないものの、Maffeo Vegio (Maphaeus Vegius, 1407–58) によるいわゆる『第13歌』125–301には、ルトウリー人によるトゥルヌスの遺体のアルデアへの移送とそこでの葬儀が描かれた。

*⁹ 管見のかぎり、これまで「葬礼」が作品全体にもつ意味に目を向けた研究はほとんどなかった。Castroは、作品中もっとも際立つ葬礼であるアンキーセース法要が作品の流れと整合的であることを論じている点で、その一つに数えてよいかもしれないが、「葬礼」そのものを問題とはしていない。

*¹⁰ 『アエネーイス』の結末場面は作品理解のもっとも重要な鍵であることが疑いない一方、読む者をもっとも当惑させてきた箇所でもある。この場面を論者はこれまで二つの論考(高橋(2003), (2011))において検討した。本論もそれらの議論に連なるものだが、ある種の循環論を避けるため(と同時に、錯綜した問題に対して観点を限定するため)、これまでの議論については最後に触れることにする。

quisquis honos tumuli, quidquid solamen humandi est,
largior.’ (10.491-494)

「わが言葉を忘れずに伝えよ、エウアンドルスへと。彼のせいだ、パッラースをこのような姿で送り返すのは。どのような墳墓を荣誉とし、どのような埋葬を慰めとするも好きにせよ。」

と語り、アエネーアースは自分が討ち果たしたラウススに対し、

‘quid tibi nunc, miserande puer, pro laudibus istis,
 quid pius Aeneas tanta dabit indole dignum?
 arma, quibus laetatus, habe tua; teque parentum
manibus et cineri, si qua est ea cura, remitto.
 hoc tamen infelix miseram solabere mortem:
 Aeneae magni dextra cadis.’ (10.825-830)

「憐れむべき子よ、いま、おまえの功しに何を報いようか。敬虔なアエネーアースは何を与えれば、これほどの心ばえに似つかわしいか。おまえが喜びとした武具はとっておけ。おまえを父祖の霊と灰のもとへ送り返してやろう、それが心遣いとなるのなら。悲運とはいえ、このことを哀れな死の慰めとするがいい、大いなるアエネーアースの右手により討たれたことを。」

と語りかける。

そして、葬儀は言うまでもなく死者に永遠の別れを告げる場である。死者の霊は彼岸へ旅立ち、残された者は悲嘆に区切りをつける。アエネーアースがパッラースの遺体を父エウアンドロスのもとへ送り出すとき、

mille uiros qui supremum comitentur honorem
 intersintque patris lacrimis (11.61f.)

千人の勇士を遣わして、最後の儀礼に供をさせ、父と涙を分かち合わせる。

また、

harum (sc. uestium) unam iuueni supremum maestus honorem
 induit (11.76f.)

そのうちの一着を若者への最後の儀礼の品として悲嘆にくれながらまとわせる。

と語られ、英雄は

‘salve aeternum mihi, maxime Palla,
aeternumque uale.’ (11.97f.)

「永遠にさらばだ、偉大なるパッラスよ。永遠の別れだ。」

と呼びかける。以後は二度とまみえることのない「最後」が強調されている。それは次の戦いに進むために悲しみに区切りをつけるという点で告別は慰めと表裏一体のものと理解される。第6歌でいわゆるローマの英雄のカタログの最後に置かれた青年マルケッルスとの場面もこれに連なるものと考えてよいかもしれない。そこではアンキーセースがマルスの野で営まれた盛大な葬儀に言及し(6.872-874)、期待を一身に背負った青年の夭折を惜しむ(870f., 875-882)。

さらに、葬礼が競技祭の形を取る場合がある。『イーリアス』第23歌はパトロクロスの葬儀に続いて全体の三分の二以上が彼の霊に捧げた競技祭から構成されている。『アエネーイス』でもこれをモデルに第5歌でアンキーセース一周忌法要の競技祭が描かれる。

2.2 永遠の記憶

以上が「葬礼」の一般的通念にそった用例とすると、以下に挙げる例には作品に特徴的と思われる使われ方が認められる。

上に見たパリヌールスの嘆願に対して、彼が埋葬も済まぬうちに彼岸へ渡ろうと逸っていることから、アエネーアースに同行するシビュッラがその叶わぬ望みを戒めたのち、

‘sed cape dicta memor, duri solacia casus.
 nam tua finitimi, longe lateque per urbes
 prodigiis acti caelestibus, ossa piabunt
 et statuent tumulum et tumulo sollemnina mittent,
aeternumque locus Palinuri nomen habebit.’ (6.377-81)

「いま言うことを聞いて胸に刻み、辛いめぐり合わせの慰めとせよ。おまえのため、土地の人々が遠くからも、あちらこちらの町々からも天上の前触れに促されて集まり、遺骨の清めを施すであろう。塚を立て、塚に供物を捧げるだろう。その場所はパリヌールスの名を永遠にとどめるであろう。」

と告げる。葬儀における死者との身体的な別れが永遠である一方で、葬礼は死者に対する記憶を永遠にこの世に留めるとされている。同様の例はミーセーヌスと、上にも触れたカイエータの場合に見られる。

at pius Aeneas ingenti mole sepulcrum
 imponit suaque arma uiro remumque tubamque
 monte sub aërio, qui nunc Misenus ab illo
dicitur aeternumque tenet per saecula nomen. (6.232-35)

さて、敬虔なるアエネーアースは墓所を高く築き上げ、勇士の武具、櫓、ラッパを納める。その上に聳え立つ山はいま、勇士にちなんでミーセヌム岬と呼ばれ、幾世紀にわたり永遠にその名をとどめている。

Tum se ad Caietae recto fert limite portum.
 ancora de prora iacitur; stant litore puppes.
Tu quoque litoribus nostris, Aeneia nutrix,
aeternam moriens famam, Caieta, dedisti;
et nunc seruat honos sedem tuus, ossaque nomen
Hesperia in magna, si qua est ea gloria, signat.

At pius exsequiis Aeneas rite solutis,
 aggere composito tumuli, postquam alta quierunt
 aequora, tendit iter uelis portumque relinquit. (6.900-01, 7.1-7)

それから彼（アエネーアース）はまっすぐにカイエータの港へ向かう。舳先から錨が投げられ、船が岸に並ぶ。アエネーアースの乳母よ、あなたをもまた、われらの岸が永遠に伝えるよう、死とともにカイエータの名を残した。いまも、あなたに捧ぐ栄誉がこの場所を守る。その名が、ささやかな栄光ではあれ、大いなるヘスペリアの中に遺骨の在りかを示す。さて、敬虔なるアエネーアースは、しきたりどおりに葬礼を果たし、墓所の盛り土を築いてから、沖の水面が静まったのち、帆を張って出航し、港をあとにする。

三人の死は、アエネーアース一行がイタリア本土へ到着する前にネプトゥーヌスによって「ただ一人だけ、潮の渦に失われる者があり、捜索することになろう。このただ一人の命が大勢の身代わりとなろう」（5.814f.）と予言されたパリヌールスの場合に明瞭のように、「ローマ建国」という使命達成に向けて必要とされた犠牲であると考えられる。その報いとして名前が地名に冠せられることは、それぞれの人物に対する敬意をローマの国と歴史の中に刻むものとして理解される。

「葬礼」が建国事業の犠牲者への永遠の記憶を含意するもっとも顕著な例としてニーススとエウリュアルスの場合を挙げることができる。悲劇に終わる果敢な試みの前にニーススはエウリュアルスに向かって、

sit qui me raptum pugna pretioque redemptum
mandet humo, solita aut si qua id Fortuna uetabit,
absenti ferat inferias decoretque sepulcro. (9.213-215)

「私なら、誰かが屍を戦場から救い出すか、身代金で買い戻すかして土に葬ってくれればよい。それも運の女神がいつものように許さぬなら、遺骸のないまま葬儀を出し、墓に祀ってもらえればよい。」

と語っていた。攻め寄せるルトウリー軍の先頭で槍先に晒し首となった(9.465-467)二人にどのような弔いがなされたかは語られない一方、代わりに詩人は自身の声で彼らに呼びかける。

Fortunati ambo! si quid mea carmina possunt,
nulla dies umquam memori uos eximet aeuo,
dum domus Aeneae Capitoli immobile saxum
accolet imperiumque pater Romanus habebit. (9.446-49)

幸せなる二人よ。私の歌にいかばかりかの力があるなら、いつの日にも、そなたらは決して忘れず、後世に伝えられよう、アエネーアースの家がカピトリーウムの揺るぎなき巖に構えられ、ローマの父が覇権を握っているかぎりは。

叙事詩の語り自体が二人の記憶をローマとともに留める葬礼であるかのようである^{*11}。

2.3 葬礼の拒絶：癒えることのない悲憤

『イーリアス』では、ヘクトールの嘆願をアキレウスは一顧だにせず、遺体を激しく痛めつけるものの、最後にはプリアモスの嘆願を聞き入れ、ヘクトールの葬儀を執り行なうことを許す。葬礼の拒絶が激しい怒りを表わすとともに、葬礼が施されるとき、そこに怒りについて一定の終息が示されている。『アエネーイス』でも、葬礼の拒絶が激しい怒り(ira)、ないし、悲憤(dolor)を表わす例が見られる。ただ、その終息については明示されない。そこに違いがあるように思われる。

ディードーはアエネーアースに対する怒りに発する呪詛の中で

^{*11} Duckworth は二人の死が気高い目的をもちながら誤った行為に走った結果によって第9歌から第12歌の出来事、とりわけ furor に導かれたトゥルヌスの死を準備していると論じた。この見方に立った場合、二人の死に詩人から葬礼に相当する詩句が捧げられるのであれば、トゥルヌスの死にも同様のことが想定されて不思議はないことになる。

‘sed cadat ante diem mediaque inhumatus harena.
 haec precor, hanc uocem extremam cum sanguine fundo.
 ‘tum uos, o Tyrii, stirpem et genus omne futurum
exercete odiis, cinerique haec mittite nostro
 munera. nullus amor populis nec foedera sunt.
 exoriare aliquis nostris ex ossibus ultor
 qui face Dardanio ferroque sequere colonos,
nunc, olim, quocumque dabunt se tempore uires.
 litora litoribus contraria, fluctibus undas
 imprecor, arma armis: pugnent ipsique nepotesque.’ (4.620–29)

「時いたらずに倒れて、砂地のあいだに埋葬もされませぬよう。これが私の祈り、これが最期の声、血とともに注ぎ出す。それに、さあ、テュロスの人々よ、彼の子ら、将来の血統のすべてをあなた方は憎悪の念で悩まし続けよ。わが灰にこれを手向けて供物とせよ。いかなる愛も盟約も両国民のあいだにあつてはならぬ。立ち上がれ、そなた、まだ見ぬ者よ、わが骨より出て復讐者となれ。火と剣をトロイアの移民のうしろから突きつけるのだ、いまも、このさきも、いつであれ、もてる勢力があるときには。海岸が海岸と、波が波と敵対し、武具が武具と敵対するよう祈る。戦い続けよ、彼ら自身も、その子孫も。」

と語る。怒りは直接の標的であるアエネアースを越えてはるか遠くローマに向けられている。

また、女戦士カミッラを討ち果たしたアッルスの場合、女神ディアーナの意向を受けたニンフのオーピスが

‘huc periture ueni, capias ut digna Camillae
 praemia. tune etiam telis moriere Dianae?’

「こちらへ来て身を滅ばせ。受け取るのだ、カミッラにふさわしい褒美を。おまえでもディアーナの武器で死ねるのだ。」

という言葉とともに必殺の矢を射当てると、

illum expirantem socii atque extrema gementem
obliti ignoto camporum in puluere linquunt;

Opis ad aetherium pennis aufertur Olympum. (II.865–67)

彼が息絶えようとし、最期の呻きを洩らすのに仲間たちは目もくれず、平野の見知

らぬ砂塵の上に置き去りにする。オーピスは天高きオリュプスへと翼を羽ばたかせて去る。

上に見たように、葬礼が死者に対する永遠の記憶を残し、その名前を伝えもするのに対し、アッルスは「忘れ去られ」(obliti 866)、打ち捨てられた砂地は「無名の」(ignoto 866)と言われる。このように処断したのが永遠の存在たる女神であるとすれば、その怒りはいつまでも決して解けないかのような印象を受ける。

2.4 死者への誉れ：復讐

こうした怒りや悲憤は自然な心の動きとして復讐を希求する。そして、復讐を果たすことが死者への誉れをなすという例が見られる。

上に引用したディードーの呪詛にはこの面が顕著である。それは「わが灰にこれを手向けて供物とせよ」(cinerique haec mittite nostro / munera 4.623f.)、「立ち上がれ、そなた、まだ見ぬ者よ、わが骨より出て復讐者となれ」(exoriare aliquis nostris ex ossibus ultor 4.625)という言葉に端的に現われている。

また、アッルスを倒したオーピスはディアーナ女神から次のような指示を受けていた。

'haec cape et ultricem pharetra deprome sagittam:
hac, quicumque sacrum uiolarit uulnere corpus,
Tros Italusque, mihi pariter det sanguine poenas.
post ego nube caua miserandae corpus et arma
inspoliata feram tumulo patriaeque reponam.' (II.590-94)

「これを取れ。矢筒より復讐の矢を繰り出せ。誰であれ神聖な体に傷を負わせる瀆神を働いた者には、この矢により、トロイア人もイタリア人も区別なく、血の報いを払わせよ。そのあとは、私が雲に包んで彼女の哀れな遺体を、武具を剥がれぬうちに、墓所へと運ぶ。祖国へ届けるであろう。」

カミッラの仇討ちはオーピスが果たす一方で、遺体の送り届けはディアーナみずから行なうという。ここで、この箇所モデルとされる『イーリアス』第16歌666-683行の場面との比較が有益であるかもしれない。そこでは、パトロクロスに討ち取られ、武具を剥がれたサルペードーンのために、ゼウスがアポローンに命じて遺体を故国リュキアへ運ばせる。「その地で彼を兄弟や仲間らが懇ろに葬り、塚を築いて碑を建てよう。それが死者への誉れであるから」(Hom. II. 16.674f.)であった。これに先立ってゼウスはその場でへ

クトールにパトロクロスを討たせようかと思案もするが、結局、それを思いとどまった (ibid. 646ff)。これと比べて、『アエネーイス』の場合、他の者に任せずディアーナ自身が遺体を送り届ける点で弔いの重みが増していると同時に、仇討ちが即座に果される点で葬礼と復讐が密接に関連づけられているように思われる。実際、カミッラの討ち死にを見届けたオーピスは次のように語る。

‘non tamen indecorem tua te regina reliquit
extrema iam in morte, neque hoc sine nomine letum
per gentis erit aut famam patieris inultae.
nam quicumque tuum uiolauit uulnere corpus
morte luet merita.’ (II.845-49)

「それでも、そなたの女王はそなたが面目を失ったままにはしなかった、すでに死の瀬戸際にあるとはいえ。この死は必ずや名を上げよう。諸国に広められよう。報いを果たせぬ女との世評を立てられもしまい。誰であれ、そなたの体に傷を負わせる瀆神を働いた者は相応の死で贖うことになるから。」

ここには、復讐の果されることが死者の誉れとして強調されている。

いま一つ同様の例として、息子パッラースの遺体と対面したときにエウアンドロスが使者にアエネーアースへの伝言として語った言葉を挙げることができる。

‘quod uitam moror inuisam Pallante perempto
dextera causa tua est, Turnum gnatoque patrique
quam debere uides. meritis uacat hic tibi solus
fortunaque locus. non uitae gaudia quaero,
nec fas, sed gnato manis perferre sub imos.’ (II.177-81)

「パッラースが命を落としたいま、なぜ厭わしき生に留まるかと言えば、あなたの右手ゆえだ。トゥルヌスに対し息子と父のため、果たすべき務めをご存じであろう。それだけが唯一、あなたの手柄にも武運にもまだ欠けている。私が求めるのは生の喜びではない。それはかなわぬ。ただ、息子に知らせを届けたいのだ、冥界の底まで。」

ここでは、息子の仇討ちが果されることをこの世で見届け、その知らせをみずから届けることが供養とされている。このエウアンドロスの思いが結末場面でのアエネーアースによるトゥルヌスへの止めに通じていることは疑いないと思われるが、この点はあとに述べる。

3 永遠の憎悪と悲憤

上には、「葬礼」をめぐって、単にそれが死者にも残された者にも魂の平安をもたらすという以外に、永遠の記憶、怒りと悲憤、復讐といった要素が表現に与っていることを見た。結末場面の検討に移る前に、ここで注意しておきたいのは、それらの要素が作品の根幹と深く関わるものであるように思われることである。

序歌において、アエネーアースの苦難の原因は「非情なユーノーの解けぬ怒りゆえ (saeuae memorem Iunonis ob iram 1.4) 」と言われ、女神の「怒りと非情な痛憤のもと心から消えていなかった」 (necdum etiam causae irarum saeuique doloris / exciderat animos 1.25f.) と語られる。そして、このことは序歌の直後にも、

Iuno aeternum seruans sub pectore uulnus

haec secum: 'mene incepto desistere uictam

nec posse Italia Teucrorum auertere regem!

quippe uetor fati.' (1.36-39)

いつまでも消えぬ恨みを胸に抱くユーノーは心中に言った。「負けたのか、私は。事を仕遂げることを諦めるとは。テウクリア人の王をイタリアから遠ざけられないとは。」

というように、繰り返し強調されている。

このように、決して忘れることがないとして提示されたユーノーの怒りと悲憤は、作品の結末を前に、ユピテルとの取り引きの場面で終息するかに見える。ここでユーノーにユピテルは「いまや、どのように終結させるのだ、后よ。最後に残るのは何だ」 (quae iam finis erit, coniunx? quid denique restat? 12.794) と切り出し、「いまはもう、やめるがよい。……黙したまま、それほど悲憤に身を苛むな」 (desine iam tandem ... ne te tantus edit tacitam dolor 800, 801)、「これでもう最後だ」 (uentum ad supremum est 803)、「これ以上の企ては私が禁ずる」 (ulterius temptare ueto 806) というように、「最後」を強調しながら、画策の打ち切りを求める。対するユーノーも「不本意」 (inuita 809) ではあっても戦場を去る意志を表明し (et Turnum et terras reliqui 809, nunc cedo pugnasque exosa relinquo 818)、ラティウムの言葉としきたりを存続させ、トロイア再興を成就させないという条件が認められると (819-28, 833-840)、「喜んで気持ちをあらためた」 (mentem laetata retorsit 841) と語られる。

このことからはず、ユーノーの怒りと悲憤が作品の大枠を形作っていることが見て取

れる。しかし、その一方で、すべてがここに解消するのではないことも序歌の提示から推測される。序歌には、怒りと悲憤の原因として第一に女神の愛でるカルターゴーがトロイアの後裔によって覆されることが挙げられていた (I.12-22)。それは上に見たディードーの呪詛に連なるものである。この点で、女神の怒りと悲憤は、「トロイア人が埋没する」(subsident Teucris I.2.836) というユピテルの約束によって、この場ではいったん銚を収めたものの、なお作品の枠を越えてくすぶり続けることが暗示されていると理解してよいと思われる^{*12}。実際、それはここでユピテルが「そなたはユピテルの妹であり、サートウルヌスのもう一人の子、憤怒の大波もなんと激しく胸の底にうねるものか」(es germana Iouis Saturnique altera proles, / irarum tantos uoluis sub pectore fluctus I.2.830f.) と驚嘆するほど激しく大きく、それゆえに、ローマ建国について「かくも大きな苦難の業」(tantae molis I.32) という序歌の提示がなされると考えられる。

加えて、作品の枠を越えて続く悲憤という点では、トゥルヌスの姉妹ユートウルナの悲嘆にそれが明瞭に示されることに注意しておきたい。アエネアースとトゥルヌスの一騎打ちに決着をつけるべくユピテルが遣わしたディーラの姿を認めて、もはや万策尽きたことを悟ったユートウルナは次のように嘆く。

‘nec fallunt iussa superba
magnanimi Iouis. haec pro uirginitate reponit?
quo uitam dedit aeternam? cur mortis adempta est
condicio? possem tantos finire dolores
nunc certe, et misero fratri comes ire per umbras!’ (I.2.877-81)

「天上からの命令にも気づいている。ユピテルの大いなる御心によるのだ。これが純潔を捧げた見返りなのか。何のために永遠の命を下さったのか。なぜ奪い取ったのか、死の掟を。さもなくば、これほどの悲憤を終わらせることもできるように。せめていま、哀れな兄弟のため冥途の道連れとなれように。」

ニーススとエウリュアルスに向かって、彼らの記憶をローマの続くかぎり伝えと詩人が呼びかけたのは、詩の語り自体が葬礼を施すようだと上に述べた。それとは対をなすようにユートウルナはいつまでも悲憤を抱き続けることによってトゥルヌスの記憶を永遠に留め、それをもって葬礼を果すかのようにも見える。

^{*12} Cf. Feeney (1990).

4 「葬礼」の検討結果と結末場面

これまで「葬礼」のモチーフが、基本的通念の枠を越えて、「永遠の記憶」「怒りと悲憤」「復讐」といった関連要素を通じて作品の根幹に関わる表現に与っていることを見てきた。この検討結果を踏まえて、以下には結末場面での「葬礼」について述べる。

まず気づかれるのは、アエネーアースによる「止め」にパッラースへの「葬礼」という側面を見て取れることである。トゥルヌスの嘆願を聞き、いったんは柄にかけた手を止めながら、アエネーアースはパッラースの剣帯が「非情な悲憤を想起こさせる戦利品」(saeui monimenta doloris exuiasque 12.945)として目に入るや、

furiis accensus et ira
terribilis: 'tunc hinc spoliis indute meorum
eripiare mihi? Pallas te hoc uulnere, Pallas
immolat et poenam scelerato ex sanguine sumit.'

燃え上がった狂気と怒りは恐るべきものとなった。「わが仲間から奪った武具を身に着けたおまえを助けてやと思うのか。これはパッラースの一撃だ。パッラースがおまえを生け贄とし、罪に汚れた血により報いを果たすのだ。」

という言葉とともにトゥルヌスの胸に剣を埋める。それはパッラースを奪われた怒りと悲憤が振るわせた復讐の剣と読める。悲憤に発する復讐が死者に捧げる栄誉として「葬礼」に与ることはディアーナとオーピスがカミッラの仇討ちを果たし、弔いを行なった例に見た。また、上に見たように、トゥルヌスを倒すことをエウアンドロスはアエネーアースに託し、その成就の知らせを息子への冥途のみやげとする、というように語っていた。これらのことは「止め」とそれがもたらすトゥルヌスの死にパッラースへの「葬礼」という意味合いを示唆するように思われ、そうだとすれば、作品は「葬礼」の場面をもって終わっているとも考えられるかもしれない。

では、そのような結末において「葬礼」に言及するトゥルヌスの嘆願はどのように理解すべきか、本論の出発点とした問題へ進むことにする。

トゥルヌスの嘆願が求めるところは、言葉どおりに取れば、助命もしくは死後の遺体返還であった。「止め」によって助命が否定されたことは自明である一方、作品がトゥルヌスの死をもって終わるために遺体返還まで拒絶されたかどうかは分からない。けれども、上に見たように、ディードーやカミッラに関する場合には、悲憤に発する復讐が葬礼の拒絶という形で現れた。

ここでカミッラの死とトゥルヌスの死に共通する要素を確認することが有益であるように思われる。もっとも顕著な共通要素は

uitaque cum gemitu fugit indignata sub umbras.

命は一つ呻いてから無念を抱いて冥界の底へ去った。

というまったく同じ詩行 (11.831, 12.952) が両者の死の叙述に用いられていることである。Kepple はそこから出発して、アッルスによるカミッラ殺害とアエネーアースによるトゥルヌスへの止めのあいだの平行を細かに指摘した^{*13}。この平行がトゥルヌスを倒したあとのアエネーアースにすぐに訪れる死を暗示するとした結論の当否には立ち入らないが、カミッラの死とトゥルヌスの死のあいだの対応関係については説得的な議論を行なったように思われる。そのうえで、「葬礼」という観点からも Kepple が触れていないさらに重要な対応を指摘することができる。それはカミッラのために女神ディアーナと実行役でカミッラとは姉妹同然であるニンフのオーピスが仇討ちを果たしたように、トゥルヌスにも女神ユーノーとトゥルヌスの姉妹であり、女神の手先として働くニンフのユートウルナが手助けしていたことである。

いま仮にアエネーアースの怒りと悲憤がトゥルヌスの遺体返還まで拒むほど激しいものであったとしてみよう。この仮定はそれほど空疎なものではない。トゥルヌスの嘆願は「これ以上は憎悪に走るな」(*ulterius ne tende odiis* 938) という言葉で結ばれている。Tarrant はこの言葉がアキレウスの場合を想起させると註釈し、「憎悪」(*odia*) という語がユーノーの（つまり、決して消えない）怒りと悲憤に通じると解する^{*14}。この理解は妥当と思われる。「怒りと非情な痛憤」(*irarum saeuique doloris* 1.25) がユーノーの心から消えないように、「止め」は「非情な痛憤を思い起こさせる品」(*saeui monimenta doloris* 12.945) を見たアエネーアースが「恐るべき狂気と怒りに燃え上がった」(*furiis accensus et ira terribilis* 12.946f.) 結果であったからである。

遺体返還が拒絶されれば、葬礼を施すことはできない。兄弟の死に加えて、この屈辱をユートウルナは永遠に耐え忍べるだろうか。ユーノーはたしかにトゥルヌスをほとんど見捨てるようにして戦場を去った (*et Turnum et terras reliqui* 12.809, *pugnas relinquo* 818)。しかし、それには「もとからラティウムに住む民が古来の名前を変えることも、トロイアの民となってテウクリア人と呼ばれることも、勇士らが言葉を変えて衣服をあらためることもない」(12.823-25; cf. 834-837) という条件がついていた。トゥルヌスの死はこの条

^{*13} Kepple はアエネーアースとアッルスに共通して用いられるいくつかの語彙、および、カミッラとトゥルヌスについてともに総指揮権を握ったあと戦利品が原因をなして命を落とす展開を指摘する。

^{*14} Tarrant, 335f.; cf. Grummond.

件と引き換えの犠牲であり、それに見合う敬意と礼儀が払われて当然であろうと考えられる。パリュースら放浪の苦難を終わらせるための犠牲となった人々のためにはその名前が地名に刻まれ、ニーススとエウリュアルスのためには詩人の声が記憶を残した。この点で、ラティウム为民が名前を変えないという条件がトゥルヌスの名前を消し去らないことを含意したとしても不思議はない。そこで、もしユーノーが戦場を去った条件がトゥルヌスに対する敬意と記憶を含むとすれば、トゥルヌスへの葬礼の拒絶はこの条件に背くことになる。

条件が破られた場合、カミッラのためにディアーナがなしたと同様の報復をユーノーが果そうとするであろうことはそれほど想像に難くない。第Ⅰ歌冒頭で女神は、女神パッラスが小アイアースに神罰を下したのに、なぜ自分はアエネアースを滅ぼせないのか、と嘆き（Ⅰ.39-49）、それから風神アエオルスにトロイアの艦隊を海の藻屑とするよう命じた。そこから類推すれば、ここでも、ディアーナに倣ってアエネアースに対する報復をユートルナに命じることは十分に予想できる。その結果が仲間から忘られて砂塵の上に置き去りにされたアッルスと同様であったとすれば、アエネアースが「砂地の上に埋葬もされませぬよう」（4.620）と祈願したディードーの呪詛が現実性を帯びてくる。呪詛のうち、ローマに対するカルターゴの敵対とハンニバルの出現は歴史上の事実となることも思い合わせるべきかもしれない。

ただし、これはあくまでトゥルヌスへの葬礼が拒絶されたと仮定した場合に推論される展開である。『イーリアス』では、アキレウスがヘクトールを倒したとき、彼の遺体を犬や鳥に食わせるとはつきり断言した（Hom. *Il.* 22.336f, 354）けれども、結局、遺体はプリアモスに返された。アエネアースの怒りと悲憤が「止め」のときにいかに激しくとも、トゥルヌスの遺体を父ダウヌスのもとへ送り返すことも十分にありえる。問題は、それが語られていない以上、トゥルヌスへの葬礼がなされたか否かではないように思われる。むしろ、それまでの展開に照らして結末場面においても「葬礼」に重要な意義が与えられ、トゥルヌスへの葬礼拒絶が作品の枠を越えて想定される「ローマ建国」事業の未来に深刻な影を落とすかのような暗示が見られるにもかかわらず、そのすべてを明瞭に語らないまま「止め」をもって終わる結末場面の曖昧性の意味を問題とすべきであろう。その点を次に述べる。

5 結末場面の曖昧性

曖昧性という点では、本論が考察の出発点とした「私を、あるいは、そうしたいなら、命の光を奪い取ったあとの体だけでもよい、わが一族に返してくれ」というトゥルヌスの

嘆願も、言い回しそのものが曖昧であったことから問題が生じている。結末場面には他にも曖昧な表現が多く見られる。

上にも「葬礼」の観点から見たように、仇討ちとしての「止め」はパッラースの犠牲に報い、エウアンドロスへの義務を果たす点で英雄にとってほとんど必然の行為とも理解される。その一方で、「おまえの勝ちだ。敗者の掌を差し伸べる私をアウソニア人らも見届けた。ラーウィーニアはおまえの妻だ」(*uicisti et uictum tendere palmas / Ausonii uidere; tua est Lauinia coniunx* 12.936f.)と明瞭に敗北を認めて嘆願する相手を殺すのは「忘れるな、……従う者には寛容を示して、傲慢な者とは最後まで戦い抜くことを」(*memento / ... parcere subiectis et debellare superbos* 6.851, 853)というアンキーセースの忠告に反するように見える。二つのうち、アエネーアースは躊躇ののちに前者を選択した。英雄にはアウグストゥスの姿が重ね合わせられていると考えられることから、この選択の当否について学者の議論が分かれることとなった。詩人は批判的な意図を込めているのかどうか、解釈が難しい^{*15}。

論者がこれまでに発表した考察も^{*16} トウルヌスの死をめぐる曖昧性にいくつかの点で着目した。

その一つはトウルヌスの嘆願の本意はそもそも助命にあるのかという疑問に発する。ユーノーが戦争を起こした狙いは、アエネーアースが勝つことは動かせないのもので、戦争を長引かせ、それによってトロイアとイタリア双方にできるかぎり多大な犠牲を強いることにあった(7.314-316)。しかし、アエネーアースとトウルヌスが戦えば結果は明らかで、戦争はそこで終わってしまうため、女神はユートウルナも使ってトウルヌスの延命工作进行を講じた。けれども、ユーノーの意図と裏腹にトウルヌスが欲したのは命よりも武勇の誉れであった。そこで、本望が遂げられようというときに延命を願うのは不自然にも見える。実際、嘆願の言い回しは曖昧であり、助命と遺体返還が字義どおりに二つに一つの選択として示されているなら、遺体返還が本意であった可能性は助命についてと同じだけあることになる。

いま一つはトウルヌスを射貫いたアエネーアースの槍に関わる。その描写は「必殺の」と読める(*telum fatale* 919, *uolat atri turbinis instar / exitium dirum hasta ferens* 923f.)。これが字義どおりなら、槍で腿の中央を貫かれた(926)トウルヌスは致命傷を負ったはずである。もしそうであった場合、助命嘆願は意味をなさなくなる。トウルヌスの側から言えば、致命傷の自覚があったとすると、遺体返還に嘆願の本意があったことになる一方、自

^{*15} 問題の適切な概観・整理として、cf. Horsfall (1995), 192-216, Tarrant, 16-24. (いわゆる悲観論の代表格だが) 最新の論考として Putnam (2011) がある。

^{*16} 高橋 (2003), (2011).

覚がなかったとすると、助命嘆願が哀れなほど愚かしい行為であったことになる。アエネーアースの側から言えば、「止め」が不要であったことになり、そこに示された激しい怒りと悲憤も無意味であったことになる。けれども、「止め」が決定打となったために結果として槍の傷が致命的であったかどうかは大きな意味がないように見える。つまり、槍は単に「止め」を用意する意味で「必殺」と解することができ、これがおそらく一般的な理解である^{*17}。しかし、致命傷か否かがトゥルヌスの嘆願の本意と「止め」の必要性に関わるとすれば、場面全体に対して重要な意味を有することは間違いないように思われる。

さて、これらの曖昧性の原因をなすとともに、それ自体がこの場面でもっとも曖昧と思われるのは、トゥルヌスの絶命をもって作品が終わることである。唐突な終わり方を前に誰もがこれが本当に作品の結末なのかと疑問に思い、そこから、古代から現代までさまざまな『アエネーイス』後日譚が創作されてもきた^{*18}。それがただ唐突であるだけなら作品そのものが未完という見方もできるが、この結末が詩人が意図して用意したものであることはほぼ間違いない。内容的には、第 1 歌冒頭と対応しつつ「終わり」を意識した表現が見て取れる一方、分量的にも、後半では各歌の行数があとになるほど多く、第 12 歌がもっとも長いので、なおまとまった叙述が続くことは考えにくい。

では、このように作品を結んだ詩人の意図はどのようなものと考えべきか。もちろん、答えは容易に出てこない。が、一つ言えるのは第 12 歌の始まりにトゥルヌスの名前が置かれ、その命が尽きたところで歌が終わっていることになにか意味が見出せるのではないかということである。

第 12 歌の叙述は、

Turnus ut infractos aduerso Marte Latinos
defecisse uidet, (12.1f.)

トゥルヌスは、軍神の風向きが変わり、ラティウム軍が打ち破られ、勢いを失ったのを見ると、

^{*17} Tarrant, 328. それに対して岡, 266f. は「二人の英雄が運命の指図を受けることなく自由に行動していることを暗示する」と解釈した。不動であるはずの運命の道筋から外れることがありうるかのような表現がなされているとすれば、これほど曖昧なことはない。

^{*18} オウィディウスによるアルデアの灰燼から生まれた鳥とアエネーアースの神格化 (*Met.* 14.572–608) およびディードーの妹アンナとの再会 (*Fasti* 3.545–656) と、上に触れた (n. 8) Maffeo Vegio 『第 13 歌』がよく知られる。これらには『アエネーイス』解釈に資する面がほとんど見出せない一方、Le Guin による最近の小説 *Lavinia* には作品の根幹に迫る面（とくに、O'Hara, 106 も紹介するように、「止め」をアエネーアースが殺害であったと考えるのに対してラーウィーニアは必然のことと見なすという複眼的な視点、あるいは、詩人ウェルギリウス自身も作品世界のすべてを承知していないというような提示など）がある。

というように、トゥルヌスが自軍の苦境を自身の目に捉えたことを示して始まる。これと同様の叙述ないし登場人物の言及は第 12 歌を通じて繰り返される。ラティーンヌス王はトゥルヌスにアエネーアースとの一騎打ちを思いとどませようとする言葉の中で、

‘qui me casus, quae, Turne, sequantur
bella, uides, quantos primus patiare labores.’ (12.32-33)

「トゥルヌスよ、そなたは見ている、私をどのような不幸が、どのような戦争が追い回しているか、どれほど大きな苦難をまずもってそなたが耐えているかを。」

と言う。神薬によって矢傷の癒えたアエネーアースが味方の総勢とともに戦場に復帰したときには、

uidit ab aduerso uenientis aggere Turnus,
uidere Ausonii, gelidusque per ima cucurrit
ossa tremor (12.446-448)

向かってくる敵をトゥルヌスは正面の土塁から見た。アウソニア兵らも見た。と、凍るような戦慄が骨の髄を走り抜けた。

と叙述される。トロイア軍が城市に迫ったとき、王宮防衛は他の者にもできると言って、なおもアエネーアースとの一騎打ちを回避させようとするユートウルナに向かってトゥルヌスは、

‘nam quid ago? aut quae iam spondet Fortuna salutem?
uidi oculos ante ipse meos me uoce uocantem
Murranum, quo non superat mihi carior alter,
oppetere ingentem atque ingenti uulnere uictum.’ (12.637-640)

「どうしろというのだ。いま命の保証を与える幸運の女神がどこにいるのだ。私はこの目の前に見たのだ、私を呼ぶ声を上げながら、ムッラーヌスが——私が彼にまさって大事に思う者は他にない——命を落とすのを。巨体に大きな傷を受けて屈したのだ。」

と語る。ディーラに力を奪われ、孤立無援で進退窮まったトゥルヌスについては、

tum pectore sensus
uertuntur uarii; Rutulos aspectat et urbem
cunctaturque metu letumque instare tremescit,

nec quo se eripiat, nec qua ui tendat in hostem,
nec currus usquam uidet aurigamue sororem. (12.914-918)

このとき、胸中にさまざまな思いがめぐり来る。彼はルトゥリー人と都に目をやり、恐怖にたじろぐ。迫り来る死に怯え、どこへ難を逃れるか、何を力に敵に向かうか分からず、戦車も、御者を務める妹も、どこにも見つからない。

という描写がなされる。

その一方、死については、目が闇で覆われる、あるいは、光を奪われるという類いの表現が第12歌を通じて繰り返される。アマータはトゥルヌスが命を落とせば自分もこの世にはいない決意を語って、

‘simul haec inuisa relinquam
lumina nec generum Aenean captiua uidebo.’ (12.62f.)

「ともに私も捨て去るであろう、このいまましい命の光を。囚われの身となってアエネーアースの媚姿を目にしはしない。」

と訴える。一騎打ちのための祭儀の場がユートウルナの策略によって一転して修羅場と化したとき、最初に倒れた者たちの叙述を締めくくる形でポダリーリウスの死は、

olli dura quies oculos et ferreus urget
somnia, in aeternam conduntur lumina noctem. (12.309f.)

彼の両眼に過酷な安らぎと鋼の眠りがのしかかる。瞳の光が永遠の夜に閉ざされた。

と描写される。サケースによるトゥルヌスへのアマータ自害の知らせは

‘regina, tui fidissima, dextra
occidit ipsa sua lucemque exterrita fugit.’ (12.659f.)

「あなたをもっとも信頼した女王が御自身の手で果てられた。驚愕のあまり、命の光から逃れたのだ。」

と語られる。そして、トゥルヌスは嘆願の中で自身の死を「命の光を奪い取られたあとの体」(corpus spoliatum lumine 12.935)と言っていた。

このように、一方で第12歌に描かれるラティウム勢の苦境がトゥルヌスの目に映る光景として表現され、他方で死が命の光を奪うと表現されることを考え合わせるとき、結末場面は死がトゥルヌスの目を闇で閉ざすと同時に終わっていることに気づく。作品末尾の

詩行も、*uitaque cum gemitu fugit indignata sub umbras* (12.952) というように、命 (*uita*) が影 (*umbras*) の下へ去ったことを語って結ばれている。それまでトゥルヌスの目に映るものとして描かれていたこの世界が彼の死とともに何も見ることのできない暗闇に覆われたかのような終わり方に思われるのである。

この理解が正しいとすれば、結末場面は死の冷徹な絶対性を表現しようとしていると言えるかもしれない。死は誰にも訪れる。死後もこの世界は続くが、死を迎えた者はその先の時間に存在する世界に決して関与できない。この絶対則は作品の主題である「ローマ建国」と深く関わっている。第1歌でユピテルはローマ人に対して「支配の境界も期限も定め置かぬ。限りのない統治を与えた」(*nec metas nec tempora pono: / imperium sine fine dedi* 1.278f.)と約束した。ローマが永遠に存続する一方で、個人の生に限りがあれば、「ローマ建国」が達成されるためには建国事業を引き継ぐ人間が途絶えることなく輩出され続けなければならない。実際、そのようにしてローマがアウグストゥスの治世まで、幾多の苦難と危機に直面しながらその都度克服し、発展してきたことは第6歌のいわゆる英雄のカatalogにも示されている^{*19}。しかし、アウグストゥスにもいつかは必ず死が訪れる。それはアエネアースも同じである。そのあとは偉大な指導者もすべてをあとに残る者に託すしかない。託された者がピエタースに優れる英雄なら、自分の遺志を継いでくれるはずであるが、そのように事が運ぶか見届けるすべはない。こうして死の絶対性はローマの永遠性に危機をもたらし、未来を不透明にする。

ここに結末場面の曖昧性と共鳴する要素を見ることができるとも言えるかもしれない。つまり、結末場面の暗示によってトゥルヌスへの葬礼拒絶から予想されるローマの未来への深刻な影は、死の必然性との対比においてその先の未来につねに想定される不確定性とよく重なり合うように思われるのである。

そのうえで注意したいのは、葬礼がそうした不確定性の克服に向けて重要な意義を担うように考えられることである。というのも、そこには先人の遺志をあとに残る者が尊び、発展させるべき事業を継承するという意志表明が込められると理解されるからである。上に見たように、葬礼が永遠の記憶を伝えると表現されたこともこの点に合致する。その一方、葬礼が拒絶されることは遺志継承の途絶に通じるであろう。この点で、アエネアースの遺体が埋葬もされぬように、と願ったディードーの呪詛は単に英雄個人のみならず、ローマ建国の道程全体に及ぶものとも考えられる。実際、女王はカルターゴの民にローマとの永遠の敵対を託している。

^{*19} この歴史観にもとづいてキケローは『国家について』第2巻（とくに、2, 37, 45 章参照）でローマ史を概観し、それはリーウィウスに受け継がれた (cf. Miles, 88 ff.).

その点で、本論の最初にも述べたように、結末場面でもトゥルヌスの死を見届けるルトゥリー人 (12.928)、アウソニア人 (937) の姿が描かれていることに注意すべきであると思われる。彼らはトゥルヌスが自分たちのために戦ったと承知している。

‘ille quidem ad superos, quorum se deuouet aris,
succedet fama uiuusque per ora feretur;
nos patria amissa dominis parere superbis
cogemur, qui nunc lenti consedimus aruis.’ (12.234-237)

「あの勇士は祭壇に一身を捧げている。必ずや、神々のもとへも達する誉れを得るであろう。人々に語り継がれて生き続けよう。だが、われわれは祖国を失い、横暴な君主に従うことを強いられるだろう。それなのにいま、じっと野に座り込んでいるのだ。」

というユートルナの唆しにのって一度は一騎打ちの盟約を覆したのもそのためである。そこで、もしあとに託そうとする遺志がトゥルヌスにあり、それを尊ぶ者があるとすれば、それはこのルトゥリー人らであると考えられる。もちろん、トゥルヌスにはアエネーアースが背負うような使命はなかった。ただ、類する響きをトゥルヌスの嘆願を締めくく「これ以上は憎悪に走るな」(ulterius ne tende odiis 12.938) という言葉に聞き取ることとはそれほど的外れとは思われない。一騎打ちの誓約においてアエネーアースは、自分に勝利が与えられた場合には、

paribus se legibus ambae
inuictae gentes aeterna in foedera mittant. (12.190f.)

対等の条件で、双方の民が不敗のまま永久不変の盟約を結ぶこととしよう。

と宣言し^{*20}、騒乱の中で英雄が無差別殺戮 (saeuam nullo discrimine caedem 12.498) に走ったときに詩人は

tanton placuit concurrere motu,
Iuppiter, aeterna gentis in pace futuras? (12.503f.)

かくも激しく衝突させるのがよいと思われたのか、ユピテルよ、これらの民はや

^{*20} アエネーアースは「勝利がトゥルヌスに渡ったなら、敗者は退去するものと定める」(cesserit si uictoria Turno, conuenit uictos discedere 183f.) とも誓っている。つまり、この誓約では、トロイア側の敗北は想定しても、イタリアの民には敗北の想定が除外されている。ここには戦後の統合が意識されていると考えられる。

がて永遠の平和を保つ定めであるのに。

と嘆いた。戦いを終えた双方は勝敗の区別なく統合するというのが運命の定めであり、これに「憎悪に走るな」というトゥルヌスの言葉は合致する^{*21}。それは直接にはアエネーアースに向けられているけれども、ルトゥリー人らがそこに指導者から自分たちへの遺志表明があると理解すれば、彼らはその遺志を尊び、戦後の統合に協力的になることが予想される。しかし、アエネーアースの「止め」によってトゥルヌスの命は「無念を抱いて」(indignata 12.952) 散った。「憎悪に走るな」はもはやトゥルヌスの遺志ではないと考えられるかもしれない。そのうえ、アエネーアースが遺体返還まで拒絶するとなれば深刻で困難な状況が生じることが容易に想像される。ただ、トゥルヌスの命が闇に閉ざされたとき、そのように、その先の未来は誰もはっきりとは見通せない。そうした不確定性の表現に「葬礼」は与っているように思われる。

(京都大学)

参考文献

- Austin, R. G., *P. Vergili Maronis Aeneidos Liber Quartus Primus*. Oxford 1963.
- Castro, E., Interaction and Episodic Coherence in Book 5 of the *Aeneid*. *Hermes* 138 (2010), 92–108.
- Connington, J. and H. Nettleship, *The Works of Virgil*. Vols. 2–3. Hildesheim 1963 (London 18844).
- Duckworth, G. E., In Hardie (1999), Vol. IV, 304–321 (Orig. *AJP* 88 (1967), 129–150).
- Feeney (1990): D. C. Feeney, The Reconciliations of Juno. In Harrison, 339–62 (= Hardie (1999), Vol. III, 183–203 (Orig. *CQ* 34 (1984), 179–94).
- Grummond, W. W. de, *Saeuus dolor*. The opening and the closing of the *Aeneid*. *Vergilius* 27 (1981), 48–52.
- Hardie, P.(ed.), *Virgil. Critical Assessments of Classical Authors*. 4 vols. London and New York.
- Horsfall, N.(ed.), *A Companion to the Study of Virgil*. Leiden 1995.
- Heyne, G. Chr., *P. Vergili Maronis opera*. Hildesheim 1968 (Leipzig 1833).
- Kepple, L. R., Arruns and the Death of Aeneas. *AJP* 97 (1976), 344–360.
- Miles, G. B., *Livy: Reconstructing Early Rome*. Ithaka/London 1995.

^{*21} 大芝, 69 参照。

- Mitchell-Boyask, R. N., Sine fine: Vergil's Masterplot. *AJP* 117 (1996), 289-307.
- Nishimura-Jensen, J., review: Stratis Kyriakidis, *Narrative Structure and Poetics in the Aeneid. The Frame of Book 6*. Bari 1998. *Vergilius* 46 (2000), 175-80.
- O'Hara, J. J., The Unfinished Aeneid? In Farrell, J. and M. J. C. Putnam (ed.), *A Companion to Vergil's Aeneid and its Tradition*. Chichester/Malden, MA 2010, 96-106.
- Putnam, M. C. J., *The Humanness of Heroes. Studies in the Conclusion of Virgil's Aeneid*. Amsterdam 2011.
- Tarrant, R., *Virgil Aeneid Book XII*. Cambridge 2012.
- 大芝芳弘、「『アエネーイス』のトゥルヌス像」『地中海学研究』12 (1989), 49-76.
- 岡道男、『ギリシア悲劇とラテン文学』岩波書店 1995.
- 高橋宏幸 (2003), 「ウェルギリウス『アエネイス』における「非情」」『西洋古典学研究』51, 94-106.
- 同 (2011), 「『アエネーイス』結末場面における「好機」」『フィロロギカ』6, 13-33.